

南越前町瀬戸集落における星空観光に向けた取組みについて*

下川 勇^{*1}

Report about Starry Sky Tourism in Seto Village in the Minamiechizen

Isamu SHIMOKAWA^{*1}

^{*1} Faculty of Engineering, Department of Architecture and Civil Engineering

This report settles a method to push forward starlit sky sightseeing. The target area is "village Seto" of Minami-Echizen-cho, Nanjo-gun in the central part of Fukui, and this village is a small area among the forest, and a population decline advances. We plan the tourism which assumed these tourist attractions in "blue snow" being characteristic when "a star looks beautiful" in this village.

This report shows various conditions for the establishment of the starlit sky sightseeing and introduces an action from 2017 through 2018.

Key Words : Starry Sky Tourism, Seto Village in the Minamiechizen, Eco-Tourism, Revival of Regional Cuisine

1. はじめに

本報告は、文部科学省私立大学研究ブランディング事業、『宇宙』事業推進のために地域と協働する“ふくい PHOENIX プロジェクト”観光文化研究軸の取組みとして、南越前町瀬戸集落の星空観光に向けた2017年度から2018年度にかけての活動について報告するものである。ただし、本取組みは途中にあり、そのため前段にあたる種々の基本設定から、それに基づく試行的取組みに至るまでを纏めるものとする。

2. 場所の選定に関する基本設定

星空観光には「星が美しく見える」という大原則がある。そのため次の3条件を設定し、南越前町瀬戸集落を候補地として絞り込んだ。

(1) 人工照明が少ない場所

星の明るさは月の影響は勿論のこと、人工照明の影響も受けやすい。月の影響は新月を待てばよいが、人工照明の集合体である街の明かりは日常的である。これを避けるならば、街から遠く離れた場所となる。

(2) 悪天候でも観光が成立する場所

星空という自然を素材とした観光には、常に天候に左右されるという難しい側面がある。2か月前から参加者を募る通常の観光手続きが取れないため、星空が見えなくとも耐えうる地域の観光資源が必要となる。つまり、星空観光の実現には「地域資源+星空」という発想が求められる。

(3) 駅から比較的近い場所

人工照明を避けるために街から遠ざかると観光自体の成立が難しくなる。そのため主要交通機関である駅が利用できるエリアとすべきである。また、駅からの二次交通についても配慮する必要がある。これについ

* 原稿受付 2019年3月29日

^{*1} 工学部 建築土木工学科

ては観光の企画内で対処することになる。

以上の3条件に基づき瀬戸集落を選定するに至ったわけであるが、(1)と(3)については地理的な課題であり、選定の根拠として分かりやすい。難しい課題は(2)であり、そもそも既成の観光地でもなければ、観光資源は皆無に等しい。これは瀬戸集落でも同様であり、候補の絞り込みの過程で瀬戸集落を訪問した際には観光資源なるものは存在していなかった。

3. 瀬戸集落の現状と（星空）観光地としての可能性

南越前町の東部、岐阜県との県境に位置する瀬戸集落は、総面積4,800万㎡の大部分が山林で囲われ、かつて林業と農業を生業とした20程度の世帯により形成されていた。現在では高齢化が極度にすすみ、林業・農業ともに衰退を見せ、加えて空き家も目立つ状態になっている。

過疎化した集落として何ら特徴のない風景であると思われたが、詳しく調べると、明治期に建造された12基の砂防堰堤が形を変えず残存しており、土木遺産として専門家の注目を集める一面をもった集落であることが分かった。昨今の観光ニーズから思考すると、こうした特徴的な資産は、観光資源として加工することで観光市場にのせることが可能であり、市場原理からして瀬戸集落は十分に観光地になり得る可能性を有すると見なされた。



Fig.1 Seto village of panoramic view (GSI Web)

4. 活動の方向性を示すシンボル形成

瀬戸集落の調査中に、集落民の一人から興味深い情報を得ることができた。それは「青い雪」の存在である。集落民に青い雪に関するヒアリングを行った結果、昔から、年に2度程度、雪が青くなることが口伝されていた。自然現象である星空との相性の良さを直感し、これを活動のシンボルとして位置づけ、観光資源とする可能性を検討した。

検討の初期段階では、「青い雪」という概念がシンボルになり得るかを検討した。シンボルの意味には時代の解釈によって諸説あるが、日本語訳の「象徴」という言葉は概念の考察には不向きであるので、より厳密化を図るために概念規定を行った諸説⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾を参照した。青い雪という抽象的な現象は、あるものとあるものとが有縁的に結びつくとするソシュールのシンボル規定にはあたらず、ましてや意味するもの（シニフィアン）と意味されるもの（シニフィエ）が恣意的な約定によって結ばれる言語記号（サイン）として慣習あるいは約束によって作用する記号としたパースの記号論的意味では知覚の主観性がいまだ限定的であると考えた。

青い雪という存在としての原始性、その存在が認識される寓意性から思索すると、ソシュールやパースのシンボルから解放された状態が青い雪のシンボル性になりえ、その限定からの解放を示唆したカッシーラーのシンボル、すなわち人間は経験をシンボル化することによって視野（世界）を構造化していく、つまり知覚による経験的シンボル化に青い雪を照らすと、その原始性と寓意性に対してあらゆる人の感性が自由に発現され、さらに経験的に青い雪がシンボル化されていくという状態が、青い雪のシンボル性であると考えた。

青い雪という自然現象はそれ自体で神秘性を有しているように思われるが、厳密にはただ雪が青いだけである。しかし、雪が青いことに普遍性はないため、そこにシンボルにおける自由性が発現されるとともに場所の限定性へと導かれる。この意味では、前章に挙げた砂防堰堤は、場所の限定はなされやすいが、それ自体が機能（役割）、地理・歴史、人為的行為の所産であるために、ソシユールの、パース的にシンボルが狭隘化されやすくもある。この限りにおいて、堰堤よりも青い雪の方がシンボルに相応しいと考えた。

このように青い雪のシンボル化について検討したわけであるが、青い雪を活動のシンボルとして定めたのち、青い雪と場所の固有性を考慮して「瀬戸ブルー」という標語を作成し、本取組みの旗印としている。

また、青い雪の発生条件の解明にも取り組んだ。豪雪のシーズンであった2017年12月～2018年2月にかけて、瀬戸集落では積雪している状態が続いたため、調査のチャンスには恵まれた。調査は、瀬戸集落の砂防堰堤を継続的に調査しており、それを土木遺産として資料に纏めていた一般社団法人 環境文化研究所に依頼した。調査の結果、気温、日照、積雪の複合的条件が整った場合に雪が青化することが判明した⁶⁾。

5. 星空と地域資源の相関に関する基本設定

2章「場所の選定に関する基本設定」の(2)で述べたように、星空観光は悪天候の際には不成立となる。そのため「地域資源＋星空」の成立を目指すこととなる。

「地域資源＋星空」が示す名詞の順には意味がある。地域資源を主体とした観光の場合、星空は付随となり、逆に星空を主体とした観光とすれば、地域資源は星空観光を支援するための素材となる。不安定な星空を主体とした場合、それを支える地域資源には相当な工夫が必要になる。つまり、星空がなくとも観光として成立する地域を創出し、天候の良い時に星空も観望することができる、このような設定にすべきと考えた。

6. 瀬戸集落の観光形式に関する検証

3章「瀬戸集落の現状と（星空）観光地としての可能性」で述べた通り、瀬戸集落には明治期に建造された12基の砂防堰堤という特徴的な資源がある。砂防堰堤は、谷間に流れる自然河川の土石流を防ぐために設けられた施設で、瀬戸集落の地理形成上、堰堤は山奥に存在しており、観光客が気軽に楽しめる場所ではない。ただし、例えば麓から600mの殿入口堰堤、さらに600m奥の西高倉堰堤と谷中堰堤は、ガイド付きツアーによって観光資源に転化することは可能であると判断されたため、2017年度から2018年度にかけて、ツアー形式を検証する目的で、福井工業大学工学部建築土木工学科の学生を対象としたテストツアーを実施した。

6-1. 2017年度のテストツアー

6-1-1. 実施概要

- ・実施日：2017年12月3日（日）9時30分～14時00分
- ・実施エリア：福井県南越前町南条郡瀬戸
- ・参加者：福井工業大学工学部建築土木工学科下川勇研究室ゼミ生16名、一般4名
- ・実施スケジュール：
瀬戸区生活改善センター集合、テストツアーのルール解説 9時30分
テストツアー開始 10時30分
テストツアー検証 13時00分

6-1-2. 実施内容

本テストツアーでは、ツアー形式の検討材料を得ることを目的として、あらかじめ指定した集落エリア内において、学生たちが砂防堰堤を含めて何に興味を持つのかを確認した。学生たちは特に集落の自然風景に興味を持ったようであり、それぞれの視点でカメラのシャッターを切っていた。

開始当初はツアーとしてガイドを立てていたが、学生たちの多岐にわたる興味をコントロールすることが難しくなり、途中からはエリア内を自由に行動してもらうよう方法を変更した。この行動現象は、実際の観光時においても想定されるため、事前に確認できたことは有意義であった。また、砂防堰堤については途中からの悪天候のため安全面を考慮して急遽中止とした。

テストツアーの終了後は、検証作業として、集落内で学生たちによる発表会を実施した。特徴的であったのは集落の全景を撮影した学生は少なく、ミニマムに視点を定め、様々な表情を見せる足元の野草や清流などを中心に撮影していた。また、一部の学生は風化した石垣や建物にも関心を示し、そこから集落の時間的経過を捉えようとしていた。

6-1-3. 実施結果

ツアー形式の検討材料を得ることを目的とした本テストツアーを通して、次の点を確認することができた。

- ・瀬戸集落は人々を惹きつける風景を持っている
- ・目的を持たず時間を過ごすことは難しいため、風景写真を撮るなど目的を明確にしたツアー形成がよい
- ・悪天候時のツアー形成として砂防堰堤をルートに入れることは難しい
- ・ルートを集団で移動するのではなく、自由に散策してもらう形式が向いている



Fig.2 Photo Walk of landscape by students (2017)

6-2. 2018 年度のテストツアー

前年度のテストツアーによりツアー形式の方向性がぼんやりとだが見えてきた訳であるが、2017 年 12 月に、集落の「青い雪」を確認することができたので、「瀬戸ブルー」というシンボルの標語に基づく観光形式の創出を目指す計画案を作成していた。そのため、2018 年度のテストツアーは、冬以外の季節において「瀬戸ブルー」という概念の適用可能性を検証することを主目的とした。

6-2-1. 実施概要

- ・実施日：2018 年 6 月 23 日（土）9 時 30 分～12 時 00 分
- ・実施エリア：福井県南越前町南条郡瀬戸
- ・参加者：福井工業大学工学部建築土木工学科下川勇研究室ゼミ生 6 名，建築土木工学科開講科目「地域計画」受講生 8 名，一般 4 名
- ・実施スケジュール：
瀬戸区生活改善センター集合，テストツアーのルール解説 9 時 30 分
テストツアー開始 10 時 00 分
テストツアー検証 後日，大学において発表会を開催

6-2-2. 実施内容

本テストツアーでは「瀬戸ブルー」という言葉のイメージに関連する集落風景を撮影することを目的として実施した。参加者には事前に「瀬戸ブルー」の概念が集落で稀に見える青い雪に由来していること，冬場の観光だけではなく，その他の季節でも観光が成立する条件として，この概念の適用可能性を確認するという開催主旨を知らせた。

本テストツアーは、前年度の実施結果より、集落の風景写真を撮ることを前提として、定められたエリア内を自由に散策した。

後日、大学において撮影した写真の中から各自が10点を選び、撮影した風景を象徴するタイトル、その風景と「瀬戸ブルー」の関連を示すようパワーポイントの書式を統一した。発表会時に提示された写真には、杉の木が生い茂った風景を「引き込む青」とタイトル化し、引き込まれる深い青と表現したり、清流の一部を「藍」とタイトル化し、命を繋ぐ深い藍と表現するような、感性豊かな「あお」を見つけてくれた。

引き込む青

ずっとこの写真を見ているとブラックホールに吸い込まれかのような錯覚に陥る。遠くを見ていると深い青に三重はしめる。
これこそまさに瀬戸のブルーホールだ。



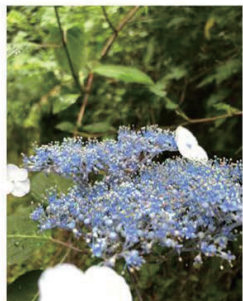
藍。

深い藍、なんとも深い藍。
命を繋げるこの藍は、瀬戸集落の人たちにとってとんでもない財産だろう。
たかが川の水、されど川の水。
瀬戸の人たちがとても大切にされているのがこの川が僕に教えてくれた。



瀬戸のマドンナブルー

瀬戸集落の山に咲く青いあじさい。
あまりにも綺麗に咲いていたので撮ってしまった。
この秋晴さに引き込まれ3分、凝視した。
この青いあじさいは、瀬戸に咲く花、また雪をマドンナとして魅了していることだろう。



静かに魅せる青

この時、わずかであった時間が止まり寂靜たちの声が聞こえた。
森の静やかな青、そして川の静やかな青。
この二つの青が混ざり合った時、金でが分かった。
「私は今、感じているんだ
瀬戸ブルーを。」



Fig.3 Examples of the results of the theme “Seto Blue” Photo Walk (2018)

6-2-3. 実施結果

学生たちが撮影した風景は類似のものが多く、集落内に「瀬戸ブルー」を連想する風景の少なさが示されることになったが、一方で「瀬戸ブルー」のイメージから様々な「あお」が豊かに表現されたことは、ツアー成立の可能性を開くものであった。合わせて、瀬戸の風景は十分に「あお」と呼べるとの学生たちの直接の感想を受けて、「瀬戸ブルー」を瀬戸の集落観光の基本とすることが決定した。

7. 観光客を持て成す郷土料理の再生と継承

集落観光の成立に不可欠な「食」について、事前調査の結果、集落で昔から創作されていた郷土料理は、調理することができる住民の存在は確認できたが、食と電化製品の近代化によって消滅していることが分かった。このことから郷土料理の再生に取り組むとともに、それを次世代に継承する取組みも合わせて企画し、2018年度の中核的な事業とした。

7-1. 郷土料理の再生に向けた調理実習

瀬戸集落の食文化の特徴は中山間の空間特性による。山の幸からなるナメシ、ワラビメシ、ムカゴメシ、ホオバメシ等の炊き込み飯、ウチマメ汁、キリグケ（大根の漬物）は昔から日常的に食されていた。コンブマキ、フキノニモノ、チマキ、ボロモチ、ヨモギダンゴ、トチモチ、ニシンの麴づけ（ニシンスシ）などもあり、これらは越冬の非常食であった。集落観光に向けた食としては、これら郷土料理の再生を試みた。また、古くから「ヌカ釜」を使用してコメを炊いていた特徴的な調理文化もあり、これも再生の可能性を探った。

7-1-1. 実施概要

- ・実施日：2018年7月8日（日）9時00分～12時30分
- ・実施場所：福井県南越前町南条郡瀬戸区生活改善センター調理室
- ・参加者：講師1名（集落民）、受講者5名（集落民2名、一般3名）、記録3名

・実施スケジュール：

瀬戸区生活改善センター集合 9時30分

調理 10時30分

試食 11時20分

7-1-2. 実施内容

本取組みは、ブランディング事業観光文化研究軸が委託している一般社団法人環境文化研究所が事前の段取り及び当日の運営を担当した。講師の集落民の指導の下、ニシンノコンブマキ、フキノニモノ、スコ、ムカゴメシを調理し、受講者は習った。ニシンノコンブマキでは湯がいた大きな生昆布の上に菜箸一組を置き、そこにつけ戻されたニシンを乗せ、菜箸を軸として昆布を巻き付けていく工夫など、受講者は指導者の習慣に触れることで特徴的な経験を得た。また、フキノニモノでは集落に自生するフキを採取するために受講者とともに移動するといった生活文化の体験も盛り込まれた。さらに講師の発案で予定になかったミョウガのお浸しを調理するために自生するミョウガを採取するなど、中山間集落ならではの体験も重ねた。

7-1-3. 実施結果

食は集落観光にとって重要なツールであり、その出来次第ではリピーターの獲得の可能性が高まる。本取組みにおいて確認できた点として、場所の特性として保存食が中心となる郷土料理においては複数料理を並べることで十分に満足できる内容になること、また食事の雰囲気形成するテーブルや設置場所等の設えを工夫することで、食事を満喫できること、そして何より、食材を自生場所に採取しに行くアクティビティが観光客の心を捉える要素であることを確認することができたことは有意義であった。

なお、同様の調理実習は2018年10月13日にも開催され、秋の郷土料理の再生を試みた。その際、コメは伝統調理法である「スカ釜」を使用して炊いた。

7-2. 次世代に継承する仕組みづくりと観光への反映

郷土料理と伝統調理法は食や電化製品の近代化にともない衰退した。そのため再生の手続きとして、次世代に継承する仕組みも同時に検討する必要があった。先述の2回の取組みでは講師の娘と孫に継承するという工夫を施した。継承という意味では本取組みは機能したと言えるが、これを観光客に持て成すとなれば更なる工夫が必要となる。

現状では、集落に観光客が自由に出入りする形式では郷土料理を振舞うことは不可能である。そのため観光形式としてツアー時期を限定するといった工夫が必要となる。また、郷土料理の継承先を増やす必要もある。集落民に拘らず関心のある一般の人々にも門戸を開く必要もあると考えられる。中山間集落という地理的空間としても心理的慣習としても閉鎖的である環境において「継承」という概念の捉え方を再検討すべきと考えている。



Fig.4 Cooking training aimed at regeneration of the local cuisine (2018)

8. 瀬戸集落の観光形式の検討

2018年度のテストツアーを通して、瀬戸集落の風景が観光資源として成立する可能性を確認した。ただし、無目的で集落を訪れた場合、滞在時間を消費する動機を見出しにくい状況であるため、観光形式として工夫が必要になると考えた。また、集落内は生活の場として機能しており、観光客が自由に訪れて生活環境を侵すことは回避すべき条件になると考えた。そこで、年に数回のツアーを原則として、「エコツーリズム」という手法を用いたツアー形式に着目した。

8-1. エコツーリズムの概念形成

エコツーリズムは自然保護と経済効果の両立を目指し、現在では市民権を獲得した国際的な取組みとなっている。概念形成過程において、1960年代から次第に世界思想として人間と自然の関係性が問われ始め、また1972年の国連人間環境会議（ストックホルム）での資源の有限性に関する問題提起等が背景となり、自然保護や野生生物保護の議論が成熟していく過程で、生物多様性の観点と観光を結び付けたエコツーリズムの概念が確立されていった。

また、場所の価値を評価する世界遺産条約では自然保護の視点を資源の価値の視点から捉え、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」を定めて登録地域に対して国の保護義務を課した経緯は、エコツーリズムの推進の追い風となった。自然遺産登録第1号のガラパゴス諸島は早期にエコツーリズムを導入し、観光資金を自然保護に適用するシステムを創設していた。このシステムがエコツーリズムの規格となり、現在の観光と自然保護の両立に関する思想を形成しているものと捉えられる。

さらに、ガラパゴス諸島をモデルとしたコスタリカでは、地域住民の利益創出、自然資源の持続的な管理、旅行者と住民双方の環境教育、観光負荷を軽減するツアー管理を要件としてエコツーリズムを推進し、共生と教育という現在日本のエコツーリズムの原型ともいえるシステムを構築した。

一方、こうした自然保護分野の潮流の後発として、1980年代には観光分野からのアプローチが見られるようになる。1980年にフィリピンで開催された世界観光会議（WTO）における「世界観光に関するマニラ宣言」では、国際レベルの観光開発では自然や文化遺産等の観光資源の保護が謳われ、1990年のバンクーバー開催Globe.90では文化や生態系の保護について資源管理の側面を強調した⁷⁾。

このように見ていくと、エコツーリズムは単純な資源保護から高度なシステム管理へと発展を遂げており、観光という方法によって経済性を内在させつつ、さらに資源保護へと循環させる国際的な社会システムの構築へと向かう方向性を示しているものと考えられる。

8-2. 集落観光に相応しいエコツーリズムの特性

着地型観光の形式として経済効果を求める観光庁の視点、自然・歴史・文化保護の観点から地域の固有性を保全し、それが観光へと繋がるとする環境省の視点、着地点は同様に見えるが、生活環境の保全を前提とした集落観光を目指す場合、また瀬戸集落のような生活文化と自然とが融和した集落であり、加えて砂防堰堤という歴史遺産を保有する状況下では、環境省の視点に沿った緩やかな観光地化を目指すことが相応しいと言える。

環境省が発行する『エコツーリズム推進基本方針～“たび”と創る持続可能な地域社会を目指して～』（平成20年6月）では、序章末尾において「この序章を読んでいるあなたの地域にも、その素材となるものは必ずあります。今こそ、そのすばらしい素材を活かして、地球環境のため、子どもたちのために、あなたの地域を活用し、発信していくことに挑戦してみませんか」との明快な立場が示されており、地球環境の保全ならびに持続可能な地域形成を前提とした観光であることが示唆されている。本基本方針の構成には、エコツーリズムの射程として、自然環境の保全と自然体験の融合策、それによる地域の魅力創出と持続可能な地域づくりの方法が提示され、それを実現するための組織づくりの方法や啓発方法等が具体的に示されている。

エコツーリズムの理念は2007年に制定されたエコツーリズム推進法第3条に定める「エコツーリズムは、自然観光資源が持続的に保護されることがその発展の基盤であることにかんがみ、自然観光資源が損なわれないよう、生物の多様性の確保に配慮しつつ、適切な利用の方法を定め、その方法に従って実施されるとともに、実施の状況を監視し、その監視の結果に科学的な評価を加え、これを反映させつつ実施されなければならない」に基づいており、取組みとしては次の6項目が関連する形式で述べられている。

①行政だけでなく、観光や自然保護、農林水産業を始めとする関連産業に携わる人たちや住民などが一堂に会し、話し合い、②地域が伝えたい魅力（＝地域の宝）をみんなで見つめ直し、あるいは探し出し、③その魅力を子どもたちに伝えつつ大切にしながら磨き、④地域外の人である観光旅行者にうまく伝え、⑤観光旅行者が得た感動を更に宝を磨く原動力とすることで、⑥地域経済に活力を与えつつ、他産業との連携などの波及効果を広げる。

この論理的階梯はエコツーリズムに限らず、あらゆる形式の観光事業化に応用可能なプロセスを示しており、無反省的に行われやすい一般的な事業とは異なり、②～⑤において継続的に反省することができ、特に観光資源の乏しい地域（瀬戸集落）では地域住民の協力のもと持続可能性を図らねばならないため、地域を場とした観光では普遍性を有した方法論であると解される。

9. 瀬戸集落におけるエコツーリズムの体制構築

エコツーリズムの概念には自然、生物、文化遺産を含んだ資源保護を観光的経済性により実現するという循環システムが存在しており、加えて住民参加と環境教育の側面から持続性を確保するという大きな世界観を有している。事前のテストツアーにより集落環境（自然、文化遺産）を資源と見なし、エコツーリズムに適した場所であると判断された瀬戸集落において、こうしたエコツーリズムへの迫及は、取組み母体となる組織体制に工夫が必要となる。

組織論を述べる気は毛頭ないが、一般論として固定化された組織はイノベーションをおこしにくく、そのため開いていなければならない。この開きは多様性の器となり、経年変化を是とする。エコツーリズムが経験的知識において概念としては固定化に向かうものの、いまだ発展過程であると仮定すると、関連組織は時流の変化に対応すべく固定化を避けるべきと考える。そのため、瀬戸集落では組織づくりに向けて次の条件を設定した。

①構成員の固定化を避ける

②長期的展望として代表は瀬戸区長とするが、周辺状況の変化により適任者を推薦する

③エコツーリズムの熟度に応じて構成員を新しくする

この条件に基づくと、エコツーリズムの概念を構成する自然、生物、文化遺産、観光、住民、教育という分野において適性を有する人々の集合体が、理想的な構成員になると考えられる。ただし、「熟度に応じて」という意味では、現在は始動時期であるため暫定の組織づくりが求められた。

組織名は当初よりテーマとしていた「瀬戸ブルー」の言葉と着地型観光として新たなイメージ性を有する「トリップ」を合成し、「瀬戸ブルーとりっぷ実行委員会」とした。構成員は、瀬戸集落を管理するとともに本事業に対して献身的な区長、文化遺産の保全と自然体験ツアーに実績のある本事業に当初から携わっていた一般社団法人 環境文化研究所所員、旅行業に従事実績があり星空観光を実施する際には宿泊の提供先となるゲストハウス玉村屋のオーナー、そして福井工業大学ブランディング事業観光文化研究軸メンバーとしてまちづくりに経験のある筆者で構成するよう、第一段階として組織した。

10. 今後の取組み

現在、瀬戸集落において社会実験的に行われているテストツアーと郷土料理の再生・継承の取組みは、星空観光を観光市場に適用するための準備段階である。その意味では取組みの判断材料となる情報の蓄積や運営のための組織づくりは、現時点で完了している。2019年度は、エコツーリズムの形式を実践として確立するために、先述の玉村屋を利用する一般観光客に向けたテストツアーを行うことを目標としている。

「瀬戸ブルー」という概念は青い雪をシンボル化した標語であることは既に述べたとおりであるが、この概念を冬にとどめず四季を通じたエコツーリズムとして確立したいと考えている。そのため2019年度のテストツアーは春・夏・秋・冬に開催することを企画中である。現在、瀬戸ブルーとりっぷ実行委員会において企画している内容を付記する。

(1) 事業名称：瀬戸ブルー～春の青～テストツアー

開催日時：2019年4月28日（日）9：00～16：30

- 事業内容：フォトウォークと郷土料理
- (2) 事業名称：瀬戸ブルー～夏の青～テストツアー
開催日時：2019年7月27日（土）17：00～23：00
事業内容：郷土料理と星空観望（合わせて蔵を活用したプラネタリウム）
- (3) 事業名称：瀬戸ブルー～秋の青～テストツアー
開催日時：2019年10月27日（日）9：00～16：30
事業内容：フォトウォークと郷土料理
- (4) 事業名称：瀬戸ブルー～冬の青～テストツアー
開催日時：未定（天候により決定）
事業内容：青い雪と郷土料理

付 録

事業の推移（2017-2018年度）

2017年度

事業名称：瀬戸区地元説明会及び懇談会
開催日時：8月10日（木）15：00～20：00
開催場所：南越前町瀬戸区生活改善センター

事業名称：集落風景から観光資源を探すフォトウォーク
開催日時：12月3日（日）9：30～14：00
開催場所：南越前町瀬戸区

2018年度

事業名称：集落風景から観光資源を探すフォトウォーク
開催日時：6月23日（土）9：30～12：00
開催場所：南越前町瀬戸区

事業名称：集落風景から観光資源を探すフォトウォーク成果発表会
開催日時：7月13日（金）13：00～14：30
開催場所：福井工業大学

事業名称：生活文化が生み出した郷土料理の再生と継承
開催日時：7月8日（日）9：00～12：30
開催場所：南越前町瀬戸区生活改善センター

事業名称：生活文化が生み出した郷土料理の再生と継承
開催日時：10月13日（土）9：00～12：30
開催場所：南越前町瀬戸区生活改善センター

事業名称：瀬戸区地元説明会
開催日時：2月24日（日）19：00～20：00
開催場所：南越前町瀬戸区生活改善センター

謝 辞

本事業は文部科学省私立大学研究ブランディング事業として実施されている。本事業を深くご理解下さりご支援を頂いている瀬戸区の伊藤利憲区長ならびに区民の皆様、郷土料理再生の取組みにご賛同いただき講師役をお引受け頂いている伊藤ゆり様、研究協力として一般社団法人環境文化研究所の田中謙次所長ならびに所員の皆様、ゲストハウス玉村屋オーナー中谷翔様、活動の維持を支援して頂いている南越前町観光まちづくり課の関根将人課長ならびに職員の皆様に、心より感謝の意を表します。

文 献

- (1) フェルディナン・ド・ソシュール, 町田健訳, 新訳ソシュール一般言語学講義 (2016), 研究社.
- (2) 丸山圭三郎『ソシュールの思想』(1981), 岩波書店.
- (3) エルンスト・カッシーラー, 生松敬三・木田元訳, シンボル形式の哲学, 全4巻 (1989-1997), 岩波文庫.
- (4) 有馬道子, パースの思想; 記号論と認知言語学 (2001), 岩波書店.
- (5) PEIRCE, C.S., 内田種臣編訳, パース著作集2 記号学 (1986), 勁草書房.
- (6) 福井県南越前町瀬戸地区「青い雪」調査・解析～福井県南条郡南越前町瀬戸地係～報告書 (平成30年3月), 一般社団法人環境文化研究所.
- (7) 真板昭夫・Maita Akio, “エコツーリズムの定義と概念形成にかかわる史的考察”, 国立民族学博物館調査報告, 第23巻 (2001), pp.15-40.

(2019年4月26日受理)